



## 術者 MITSUDO の 押さない PCI 光藤和明 著

●B5 頁264 2016年7月  
定価：本体8,000円＋税  
[ISBN978-4-260-02527-0]医学書院刊

その時(1983年)の情景はいまだに僕の記憶の中に残っている。当時僕は関西のある病院でバックアップもないまま、ひとりでPCIを行っていた。大阪で開催されたクローズドの冠動脈造影のための症例発表研究会において、その当時はあり得なかった右冠動脈の慢性完全閉塞に対するPCIの症例シネを呈示した。それに対する反応は驚くべきものであり、その会を仕切っておられた「エライ」先生お二人が、僕のことを「どこの馬の骨か」と言われて口撃されたのである。そして、僕に引き続いて光藤和明先生も、PCIの症例を呈示された。残念ながら内容までは覚えていないが、素晴らしいPCIであった。しかしながら、驚くべきことに彼のPCIに対しても、またもや「エライ」先生お二人は口撃された。当時若造であった僕たちは、これらの口撃に対して反論することもできなかった。僕は光藤先生が廊下に出てこられるのを待ち受け、「あんなこと言ってひどいよねえ」と訴えた。

これが本書の著者であられる光藤先生との初めての出会いであり、生涯の友との出会いだったが、思えばこの時の情景の中に、既に光藤先生の片鱗が光り輝く青魚の鱗のように表されてる。僕にとっての彼は、「反骨」「理想の追求」「物事は理論で説明つく」という信念を持った人である。

いい加減な考え方しか持たない僕にとっては、時には彼の究極までに研ぎ澄まされた知性と感覚に辟易することもあった。最近では、お互いに忙しく年の単位でゆっくりとお会いすることもできなくなった。しかし、今でも、そう、思いがけず僕たちの前から突然去られた後も彼は生涯の友である。この本の中で、彼は普段カテ室で患者さんたちを治療していた時とまったく同

じく生きている。

最初から最後まで本書を読み、「ああ いつもの光藤和明だ」と思わずにはおれない。タイトルの「押さない」とは裏腹に、本書の中で彼の主義主張はどんどん強く読者に対して「押される」。その内容は、先の3つのテーマ「反骨」「理想の追求」「物事は理論で説明つく」で彩られ、あまりにこれらのテーマが前面に立つが故に、僕には理解し難く、「どうしてそんなにこだわるの?」と思われる面も多々ある。正直僕を含めた凡人には完全には理解して実行することはとても不可能であり、また必ずしもその内容と主張について全面的に受け入れられるものではない。

往々にしてPCIの書籍や雑誌などの出版物には、欧米で行われた大規模臨床試験データが中心となって示される。そのような試験においては、個々の患者さんに対する治療は平準化されたものでしかあり得ない。したがってそれらの出版物に記載されているPCI手技およびその背景に関する詳細については、一般化されたもののしか記載されないのが普通である。しかるに本書においては、著者の時には独善的とも思えるその手技の詳細に関する考え方や主張がとことん書かれている。

この本は、日本におけるPCIの黎明期から、発展期を駆け抜け、今の成熟期に至るまでPCIについてとことん理論的に考え、細かい部分まで理想を追求し、反骨の精神を持って戦ってきた素晴らしい友、光藤和明の心と技術が溢れ出る本である。ぜひとも若い先生にも読んで、その内容を汲み取り、批判し、そして受け入れて欲しい。